

学務部の窓 the • window • of • the • student • affairs • Dept.

平成19年度学年暦について

学務部学務企画課

平成19年度の名古屋大学の学年暦は下記のとおりです。
 時間割表の変更、休講、定期試験の実施方法、学生への連絡事項等の案内、連絡は掲示板等により必要のつど行われますので、十分注意してください。

月	火	水	木	金	土	日	行事等	
4	2 9 16 23 30	3 10 17 24	4 11 18 25	5 12 19 26	6 13 20 27	7 14 21 28	1 8 15 22 29	4/5 入学式 4/4・6・9 新生ガイダンス 4/10 授業開始日
5	7 14 21 28	8 15 22 29	1 8 15 22 29	2 9 16 23 30	3 10 17 24	4 11 18 25	5 12 19 26 27	5/1 名古屋大学記念日
6	11 18 25	12 19 26	13 20 27	14 21 28	15 22 29	16 23 30	17 24	6/30は講義予備日
7	2 9 16 23 30	3 10 17 24	4 11 18 25	5 12 19 26	6 13 20 27	7 14 21 28	8 15 22 29	7/7・14・21・24は講義予備日 7/25～8/7 前期定期試験
8	6 13 20 27	7 14 21 28	1 8 15 22 29	2 9 16 23 30	3 10 17 24	4 11 18 25	5 12 19 26	8/8～9/30 夏季休業
9	3 10 17 24	4 11 18 25	5 12 19 26	6 13 20 27	7 14 21 28	1 8 15 22 29	2 9 16 23 30	
10	1 8 15 22 29	2 9 16 23 30	3 10 17 24	4 11 18 25	5 12 19 26	6 13 20 27	7 14 21 28	10/1 後期授業開始
11	5 12 19 26	6 13 20 27	7 14 21 28	8 15 22 29	9 16 23 30	10 17 24	11 18 25	
12	3 10 17 24	4 11 18 25	5 12 19 26	6 13 20 27	7 14 21 28	8 15 22 29	9 16 23 30	12/25・26・27は講義予備日 12/28～1/7 冬季休業
1	7 14 21 28	8 15 22 29	9 16 23 30	10 17 24	11 18 25	12 19 26 27	13 20	1/8・9・10・12は講義予備日 1/11 後期授業再開 1/18 休講予定センター試験準備 1/19・20 入試センター試験
2	4 11 18 25	5 12 19 26	6 13 20 27	7 14 21 28	8 15 22 29	9 16 23	10 17 24	2/2は講義予備日 2/4～18 後期定期試験
3	3 10 17 24	4 11 18 25	5 12 19 26	6 13 20 27	7 14 21 28	8 15 22 29	9 16 23 30	3/25 卒業式

伝言板

message • board

学生証は大切に

学務部学務企画課

最近学生証紛失による再交付の申請が増えています。学生証は本学の学生であることを証明するものだけでなく在学証明書等の自動発行や中央図書館入館等にも必要です。また、学生証に印刷されている学生番号はインターネットによる学内向け情報へアクセスに必要となります。

万一紛失したり盗難にあった場合は、所属学部教務学生掛にて再交付願書類を記入する前に必ず警察へ届け出て下さい。紛失した学生証で、消費者金融無人契約機・レンタルビデオ店等で悪用等思いがけない迷惑や被害を受けることもありますので、十分注意して下さい。

ゴミ出しマナーはルールを守って

学務部学務企画課

名古屋市では、各家庭から排出されるゴミは、種類毎に分別し、指定された種類毎に指定された曜日・指定された場所に出すことになっています。

名古屋市内に単身で下宿生活を送っている学生は、このゴミ出しルールに従い、地域の一員としてルールとマナーを守った学生生活を送るよう心がけてください。

また、ゴミの出し方が分からないときは、各区の環境事業所に問い合わせてください。

自転車の走行について

学務部学務企画課

本学近隣の文教地区は、坂の多い地形となっています。朝夕の通勤・通学時には多数の歩行者とともに多くの自転車を見かけますが、下り坂でのスピードの出し過ぎや、歩行者の間をすり抜けるような走行が見受けられます。スピードの出し過ぎで歩行者と接触すると、思わぬ大きな事故になりかねません。

自転車も、「スピードは控えめに、ブレーキは早めに。」を心がけ、歩行者に優しい走行をお願いします。

学園だより

2007.3 vol.140

平成18年度 名古屋大学学生生活広報担当グループ <主査> 米山 優 <委員> 酒井 康彦・吉政 知広

名古屋大学

<http://www.nagoya-u.ac.jp>
<http://www.nagoya-u.ac.jp/index6.html> (学園だより)

vol.140

2007.3



学・園・だ・よ・り

卒業生・修了生の大学生活の思い出文集 / 特集 / クラブ活動 / トピックス / 学務部の窓 / 伝言板

本誌に対するご意見等は下記までお寄せください。
 学務部学生総合支援課 Tel.052-789-2160 Fax.052-789-2179

次回の発行予定 平成19年7月



この印刷物は、環境に配慮した再生紙、大豆油インキを使用し、有害な廃液を排出しない水なし印刷を採用しています。

卒業生・修了生の大学生活の思い出文集

就職先は財団法人日本相撲協会千賀ノ浦部屋です

工学部 田中 周一 卒業生

この原稿を書いている今は07年の初場所がちょうど始まった頃である。06年九州場所で新弟子検査を受けた僕は当然その初場所に出場し、勝ち越しに向けて精一杯頑張っているところなのだが、同時に卒業という大きな目標に向けての正念場も迎えています。そんな状況の中で、計五年間におよんだ大学生活について振り返ってみたいと思います。

さて、自分の怠惰により大学生活も五年間になってしまった訳ですが、自分ではただ無駄な時間を過ごしたとは思っていません。むしろ、自分の人生においてはとても有意義な時間だったようにさえ思います。

そのように思う一番大きな理由は大学卒業後の進路決定においても重要な意味を持つ事になった部活(相撲部)の存在があげられます。部活において、目標に向かい辛い事や苦しい事を乗り越えてきた事は生きていく上で大きな自信にもなりました。自分が、目の前の辛い事から逃げようとしていた時に、部活の同期の仲間達は苦言をもって励ましてくれました。またその仲間達や部活の師範、先輩、後輩達とは本気で語り合い、ぶつかり合って、本気で笑ったり泣いたりしました。また北海道、九州、東京、大阪、宮城、ハワイ…etc数え上げれば切りがないですが、試合や旅行などで、日本を共に縦断(海外にも進出!)したりしました。他にも、クラブを借り切ってイベントをやってみたり、名古屋城を借り切ってノリのいい音楽をバックに壮大な素人相撲大会を開いてみたりもしました。他にもたくさんの思い出を名古屋大学体育会相撲部にもらいました。



(左側が筆者)

そしてそこには様々な苦楽がついて回った訳ですがその苦楽を共にした人たちと出会えた事、相撲部だけでなく名大にももらったたくさんの思い出はかけがえのない一生の財産となりこれからも自分を支えてくれるだろうと思います。

これから名大の四股名で日本相撲協会に新しい風を吹き込む為にいざ乗り込まんとするところなのですが、名前にいただいた母校、名大の名をすでに日本の先端を行く学術研究分野とはまた別の側面から、今以上に高められるように最大限努力して行きたいと思っています。

本当に名古屋大学に入學してよかったと思っています。
名古屋大学ありがとう!!!

よく遊び、よく学んだ四年間

経済学部 4年 磯部晴菜 卒業生

気づけばもう卒業。私の大学生活四年間は、思えば本当にあっという間に過ぎていきました。大雨だった入学式、夏の暑い中農学部の教室を借りて行われた授業、大学前に地下鉄の駅ができて歩く距離が少なくなったこと、友達と行った大学祭、ゼミの仲間と必死にプレゼンの準備をしたこと…今となってはどれも大切な思い出です。この四年間でできた思い出は本当に数え切れなくて、今こんな風に思える自分は幸せだと心から思います。

大学で過ごした時間はあっという間でしたが、大学に入って、私にとって非常に大きかったのは、与えられた自由とそしてそれに伴う責任だったように思います。授業に出ようが出まいが、何の授業を受けようが、全ては自分の自由で、結果は全て自分



(左側が筆者)

に跳ね返ってくるという環境。そこに置かれて気づいたのは、大学に入るまでの間にいかに自分が親や先生、友達などの周囲の人に支えられ、守られてきたかということでした。この四年間はそんな「井の中の蛙」だったことに気づいた私が井戸を出て、大海に向かって少しずつ泳ぎ始めた四年間だった気がします。

与えられた自由を自分でやりくりしつつ、大学の勉強とはまた違う勉強に励んだり、アルバイトに励んだり。私にとってその経験は大学で学んだ経済学の実践の場であったり、それとはまた違う学びの場であったり、様々な人間観察の場であったように思います。そこでは自分の望むような良い結果が出なかったことも多々ありましたが、どれも自分を成長させてくれる経験であり、自分が今後生きていくための糧となる良い経験であったと今は感じています。また、そこで出会った友人や共に助け合った仲間、様々なことを教えてくださった先輩や先生方は私にとって大切な宝物であり、尊敬する存在です。この場を借りて、感謝の気持ちを伝えたいです。ありがとうございました。

大学生だからこそ持つことができた自由な時間で、学生という立場だからこそできたこと。それはこの先何物にも代えがたい経験と思い出になると思います。この先社会人になって、学生という特権とも言えるような立場でなくなるのは少し寂しい気がしますが、今後もこの四年間の経験を大切に過ごしていきたいです。

recollections • collection • of • the • graduate • & • completion

「教育」という学問の世界に足を踏み入れて

教育学部 4年 竹内 健 卒業生



(中央後方が筆者)

「あ、先生になるんですね」

これは、私が自己紹介で「教育学部に所属しています」と言った時にほぼ間違いなく相手から返ってくる一言。何度言われたかなんて最早記憶の遠い彼方です。気がつけば、「名古屋大学の教育学部は…」と私の説明もすっかり洗練されてしまいました。4年間という時間の経過を感じるできごとの1つでしょうか。

この4年間で、教育における議論がますます盛んになったように感じるのには、きっと私だけではないでしょう。「教育における憲法ともいべき存在である」と教わった教育基本法は、先日改正されました。私の入学と同時期に導入された、ゆとり教

育を軸とする現行の学習指導要領は、学力低下や教育格差を危惧する声が絶えません。キャリア教育という言葉がもてはやされる一方、ニートと呼ばれる若者の問題がクローズアップされました。そうした教育の現状に対し、紙面の上で、画面の向こうで、さらにはネットの海の中で、誰もが自らの教育論を語り、議論する。そんな現代の姿を私は気に入っています。こうした議論の中から、新しい教育のあり方の萌芽がある、そんな気がしてなりません。

とはいえ、教育を学問として探求する者の末席に加わった私は、そうした潮流に対し、半歩後ろから眺めるように心がけてきました。仮に踏み込み過ぎれば「曲学阿世の徒」と吉田茂に罵倒されるでしょうし、逆に引き過ぎれば「象牙の塔」とサント・ブーヴに評されてしまいかねませんから。右足を踏み出しては教授による講義を聴き、左足を踏み出しては社会の声を聴く。こうして4年間、少しでも高みに登ろうと努めてきました。では、大学を卒業し、社会に出るといことは、この山登りをやめてしまう行為なのでしょうか。いや、きっと、登山の方向が少し変わるだけでしょう。エベレストに挑戦する理由を聞かれ「そこに山があるから」と答えたのはジョージ・マローリーですが、私も教育という学問が存在する限り、そこへの探求を続けていくつもりです。

最後に、月並みではありますが、私の4年間をかけがえのないものにしてくれた家族、友人、教員のみなさんに、この場を借りてお礼申し上げます。

4年間を振り返って

情報文化学部 4年 渡辺 沙央里 卒業生

桜が満開になると、友達と共通教育棟前の桜の木の下でお昼ご飯を食べるのが毎年の恒例だった。1年生の時はこれからの大学生活について、2年生はアルバイトや遊びの話、3年は就職活動、4年目はこれからの人生について。毎年いろいろな事を語って、あっという間にもうすぐ5回目の春がやってくる。

大学の4年間で何か特別なことを学んだかと問われると、正直なところわからない。何か特別なスキルが身についたわけでもない。しかし、私にとっては本当に大切な4年間だった。それはひとえに一生ものの出会いがたくさんあったからだ。情報文化学部には自分を持っている人が多い気がする。いろいろな趣味を持つ人がいて、学生でありながらもそれぞれ様々なライフスタイルを持っている。そして、自分と人の違いを柔軟に受け止められる人が多いのもこの学部の特徴だと思う。私も、友達の間で何でもない話に笑ったり、驚いたり、時には一緒に悩んだりした。周囲から刺激を受け、そこから学んだことも多かった。1人1人は個性的だけれど、一度集まればみんなで大騒ぎし、夏はBBQ、冬は鍋三昧だった。そして、大学での出会いは人だけではなかった。4年前、ただ何か新しいことをやりたいと思って情報文化学部に入った私は、自分の興味や関心がどこにあるのかわからなかった。しかし、様々な講義を受ける中で、自分が意外な分野に興味を持っていることもわかり、新たな学問との出会いもあった。卒業研究では、元々文系であったが、何かものを作ってみたいと思い、プログラム



(左から3番目が筆者)

グの勉強をしてみたら楽しいと思った。結果的に私は進学をしないことに決めたが、今となっては、もう少し学びたいこともあったと思う。

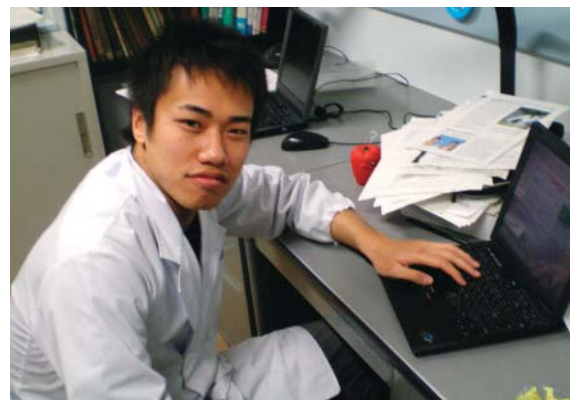
一生でたった一度の大学生活は、振り返りきれない程たくさんの思い出を私に与え、それは全て今の自分の糧になっていると感じる。これから何度も春が来て、満開の桜を見る度に、あの時友達と語った1つ1つのことやみんなではしゃいだ毎日を思い出し、そしてそれは、着々と前に進む力になるのだろう。

卒業生・修了生の大学生活の思い出文集

地上の楽園

理学部 4年 樋掛 雅則 卒業生

とにかく忙しい日々を送っていたのだろう。過去をじっくりと顧みる時間が入学してからほとんどとれなかった。今この原稿を書くにあたり、ようやく自分の生活を振り返る機会を得た。多少まとまらない部分はあるが、想いを綴る。高校時代、大学は地上の楽園だと信じて疑わなかった。具体的にどこか、何をするとところかも分からない、それでも受験勉強を頑張ることができたのは、大学に進めば夢のような生活が待っているというその漠然としたイメージがあったからだ。ただ、自分の過ごした大学生活はそのイメージとは違っていた。一年生時はよく覚えていないが、二年生、三年生時はとにかく授業、そして試験やレポートにひたすらに追われ、物理とそれに関する知識、技術の習得が生活のほぼ全てを占めていた。こんな大学生活でいいのか?という疑問もしょっちゅう頭をよぎったが、それを考える前にレポートをやらなければ話が進まない、そんな状況だった。三年時には猛烈な勧誘をうけたこともあり、一念発起し相撲部に入部。研究室が忙しくなる中で、なぜ君は相撲なんかとっているのか?なぜ相撲イベントの為に東奔西走しているのか?という自問自答は絶えなかったが、それを考える前に泥だらけになって四股を踏み、頭を下げて寄付金や出場者を募らなければ話が進まない状況だった。とにかく何かに追われ続けていた。寧ろ、追ってくれるものが無いときには「何をしたらいいのだろうか?」等の余計な疑問を封殺すべく、自ら追ってくれる存在を探していたのかもしれない。そんな具合に楽園とは程遠い、寧ろ地獄の方が近いのではと感じられる時もあった位の生活だったが、本人はそんな四年間に比較的



満足していたりする。空手還郷という言葉がある。旅や修行に出た時に、書物土産物等持ち帰らず、全て体に染みこませて、身につけて帰るといったスタンス。学部生活において自分が体現にしたのは結局それだったのかなと感じる。

大学の学部四年間、様々なものに追われる中で本当に多くの「新しい事」を経験した。物理にせよ相撲にせよ何にせよ総じて将来何の役に立つのかよくわからないものばかり。ただ、それが自分に教えてくれた事、それによって学んだ事は数多く、また、それをいつか振り返る事でさらに多くの発見があるに違いない。培われた数多くの使途不明な経験と技術。一分、一秒、全ての時間が自分にとっては大きな財産である。

ちなみに今は卒業研究に追われている。息をつくにはまだしばらくかかりそうだ。

留学先での事件

文学部 4年 清澄真己 卒業生

私にとって大学生活の思い出の中で最も印象的であり良い経験であったことは、ニューヨーク大学に交換留学をしたことです。私はそれまでサークル活動や部活動などに積極的に参加する方ではなく、また自宅から通学していたため、高校からの延長線上のように大学生活を送っていたように感じます。しかし4年次に留学をすることができたことで、本当に今まで知ることのなかった世界を知ることができました。大学では、勉強に大変シビアな環境を経験しました。また、ニューヨーク



という土地柄もあって様々な人種や民族の暮らし方、考え方に触れることができ、ルームメイトという形で家族ではない人と一緒に生活して他人の生活スタイルも知ることになりました。

その中で、最も衝撃的だった事件を紹介します。私が授業を終えて家に帰ろうと大通りの前でバスを待っていたところ、それまで多かった車が徐々になくなっていき急に閑散となってしまいました。そのうちに、信じられないくらいの数のメキシコからの移民の人たちが「We are American!」（私たちはアメリカ人だ）と叫びながら、その通りを行進してきました。私はその人数と人々の殺気に、一瞬「怖い」とさえ思いました。しかしもっと驚いたことに、沿道のたまたま居合わせたメキシコ人でもない人たちが手をたたき同じように叫び始めたのです。

滞在している間は学校の授業に付いていけなかったり、自分の考えを英語で伝えられなかったりして何度も泣くことがありました。それでも、生活していかなければならないという思いで気を張り詰めていたように思います。私がその事件で涙を流すほど感動したのは、自分だけが辛い思いをしているのではなく、みんな必死になって生きているのだと肌で感じたからです。また、周囲の人たちがそれを理解しようとする姿勢を持っているのを知り、人の優しさを感じました。留学経験は、私自身の考え方を広めて他人をより良く知ることになった、大学生活での最高の経験だったと思います。

recollections • collection • of • the • graduate • & • completion

持続可能性

農学部 4年 小森領太 卒業生

「コメを一升手に入ればしばらく食べてゆける。しかしコメ作りを覚えれば一生食べてゆける」という言葉があります。この言葉はあるものを単に消費するのと、そのものを持続的に生産しながら消費していくのでは、結果が非常に異なったものになるといういわゆる「持続可能性」というコンセプトを端的に示していると思います。

大学に入る前までの私は、この例えでいくといわばコメ作りをせずに知識をただ食べて蓄えているような存在でした。私にはひらがなから微積分にいたるまで自分で考え出したものはなにもありませんでした。過去の巨人の肩に乗って遠くを見通していただけのことです。自分の背丈以上を見通すことはできませんでしたが、自分の足で立っていたわけではありません。そのことに気がついた私は、大学では自分の考えを育てたいと思うようになりました。今までただ食べていた種もみを播い



(左から2番目が筆者)

て育てようと思ったのです。考えてみれば、大学に入るまでは種もみの準備期間だったのかもしれませんが。

私は大学に入ると少しずつこの『コメの作り方』を学ぼうとするようになったと思います。例えば、講義を聴くにしても結果のみを覚えるのではなく、その知見を得るにいたった道筋、あるいは手法を同時に学ぼうと考えるようになりました。そうすることにより自分が新しい『コメ』を『作り出す』ことが可能になるのではないかと考えたからです。

現在、私は4年生になり、研究室に配属され植物の研究を行っています。研究とはまさに「コメ作り」の場です。私はまだまだ知識を「作り出す」ことはできていませんが、少しずつ工程を積み重ねられるようにはなってきたように思います。さながら田植えの方法を覚えたようなものです。この工程を自分のものにしたときに初めて知識を再生産できるようになるのでしょう。また最近、研究が連続的なものであるということも分かってきました。コメが実る前提として土壌があるように、自分の実験にも無数の前提があります。私は種をまいていますがその土地は先人が開墾した土地なのです。

しかし、種が実るかどうかは私にかかっています。もし実ればその実りを糧にさらに広いフィールドを開拓することができるでしょう。基礎から応用へ、そして応用を生かしてさらに根本的な基礎へ。そのような持続性が研究であり、発展なのだとは感じるようになりました。願わくは私がおいしい『コメ』を実らせられるようになりたいものです。

最後に、私が無事卒業できたのは先生方の適切な指導と友人、家族の支えがあったからこそだと思います。これからもお世話になると思いますがよろしく申し上げます。

卒業生・修了生の大学生活の思い出文集

ここで学べた喜び

医学系研究科 M2 辻 桃子 **修了生**

私は医学系研究科で学ぶことができ、本当によかったです。それは、研究室で様々なバックグラウンドを持つ人たちと出会うことができたからです。ここで学ぶまで、私にとって研究をすることは、自分の興味の追求が大きな割合を占めていました。しかし、医師の資格を持って臨床を経験してきた先生から話を伺ったら、自分が診ることのできる患者さんは限られていて、より多くの人を助けるためにも研究の道を歩んできた、と教えてくれました。これは、臨床の先生が多く研究室にいるという医学系ならではの特権ではないでしょうか。私には思いつかなかった考えでした。研究をするに当たって、どういった志が正しい



(最前列左から2番目が筆者)

というわけではなく、自分とは違う想いから研究の道を進む人に出会えたことが新鮮で、嬉しかったです。

また、私は大学とは分野が異なったため、実験は初めて行うものばかりで、失敗も数多くしました。それでも、自分が疑問に思ったことをすぐに聞くことのできる先生や先輩、友達に囲まれていたことは、研究をする中で一番恵まれていたことだったと思います。後輩と共に実験をすれば、自分が学ぶことのほうが多かったです。研究をしていると、一人の世界に入りやすくなってしまいますが、決して自分ひとりではできないものではなく、多くの人たちの助けがあってこそできるものであると強く感じました。修士という2年間の短い間にも、多くの学会やシン

ポジウムに参加させていただける機会に恵まれていて、同じまたは異なる研究分野の人と交流することができたのも大きな経験となりました。中でも、研究室対抗のソフトボール大会は、久しぶりに体を動かすいい機会であり、とても楽しかったです。

この2年間、非常に恵まれた環境で実験に取り組むことができました。それを支えてくださった多くの方々から心から感謝を申し上げたいです。これから社会に出て別の道を歩んでいきますが、ここで学んだことは思い出としてしまっておくのではなく、自分の糧として別の形で社会へと還元していきたいです。

学生生活を振りかえって

多元数理科学研究科 M2 鈴木洋二 **修了生**



名大に入学して、もう6年が過ぎようとしています。名古屋に来たのもちょうど6年前です。初めての一人暮らしで、周りに知り合いがおらず、不安な毎日でした。でもサークルに入り、クラスに友人も出来、充実した大学生活をスタートさせることが出来ました。大学に入って初めに受けた衝撃は、浪川教授の授業中でのことでした。

「高木貞治の「解析概論」は P10-11 で間違いを犯している。この間違いを指摘して修正したレポートを出したらボーナス点。」今から考えれば、教科書の誤植は当たり前と思いますが、書いてあること全てを鵜呑みにしていた当時はとても驚いた記憶があります。

大学生活において、専門分野以外のことも学んで、幅を広げようということが、自分の中でのちょっとした目標でした。文学部でフィンランド語を話せるようになろうとしたり、法学部で民法の話の聞いたり、経済学部で統計解析を学んだり、と色々してみました。またサークルで合唱をやっていた関係で、

一般の合唱団に入り、東京や京都まで歌いに行ったり、オペラに参加したりもしました。下は小学生ぐらいの子達から、上は還暦過ぎの方々まで交友を深められたことで、自分の見聞を少しは広められたのではないかと考えています。

文章の後半になってしまいましたが、大学では数学を勉強していました。表現論と呼ばれる分野です。解らなかったことが解った時の面白さや、今まで解っていると思っていたことが、実は解っていないと気づき唖然としたことなど、今振り返れば楽しんでこれたのだと思います。ただし解り始めてくると、その後ろに続く難しい解らない内容がどんどん増えてくるようにも思えました。大学院に進み、自分の将来を考える上で転機になったのが、坂本先生によるアクチュアリーについての講義でした。アクチュアリーとは、保険会社等において保険数理を専門にする人達のことです。数学が実社会において本当に役立っている現場を見せて頂いた感じがして、興味を持ちました。また、坂本先生の、「自分の目で見て、自分の頭で考え、自分の言葉で話すこと」という言葉にも、とても感化されました。4月からは、生命保険会社でアクチュアリーを目指して働いていきます。大学6年間で得たものを生かして、これからも自分を成長させていきたいと思っています。

recollections • collection • of • the • graduate • & • completion

替えがたい院生時代

国際開発研究科 M2 レ・アン・トゥアン(Le Anh Tuan) **修了生**

私は何故大学院に進み、国際開発協力を専攻にしたのについては「人類は1つの惑星を分かち合っているが、この惑星には2つの世界がある。それは豊かな人達の世界と貧しい人達の世界である」という有名な政治経済学者ラーナンの言葉に強く感激した。私自身もどのように発展途上国と先進国の発展レベルの差を埋める事が出来るのかと、ずっと悩んできた。私はベトナムのような開発途上国を発展させようと思って、途上国の開発問題を教育、研究する国際開発研究科を選んだのである。ここでの2年間の勉強を経て、その理由および現実が理解できるようになって来た実感がある。

国際色豊かな国際開発研究科での留学生活は新鮮かつ充実したもので、何ものにも替えがたい時間であった。教育活動は殆ど英語で行われることや、30カ国以上から来た英語圏

能な留学生が学生の半数近くを占めるという環境の中で、私は日本に留学をしているのに、英語圏の国に留学しているように感じ、日本語だけでなく英語能力を向上させる絶好の場と思ったのである。このような環境の中で、国際開発研究科は今のグローバリゼーション時代に必要な異文化理解及び国際コミュニケーション能力を培う場でもあった。

私はここで、日本語、英語の学習以外に、自身の研究も進めている。嬉しいことに、国際開発研究科の図書館には極めて貴重な本や雑誌が豊富にあり、私は心ゆくまで研究に励むことができた。また、研究活動が主体である院生という立場でありながら、現場を知る機会も多くあった。国際開発研究科の海外実地研修を通じて知る途上国の現実、それに日本国内実地調査は、私たち留学生にとって日本の農村の実際を知るのに絶好のチャンスであった。

演習や研究発表では、学生は少人数で先生方の熱心な御指導を受けるという環境に恵まれ、学生がそれぞれのテーマで発表し、ゼミ生同士の議論を戦わせる中で、自ら考え、それを説得力のある言葉にすることの難しさ、大切さを学んだ。教員だけでなくゼミ生同士から数多くのアドバイスを頂く都度、自分も成長していく。院生に求められる、自らテーマを設定し自主的に研究を進めるといった姿勢は社会人にとっても必要不可欠なものである。国際開発研究科で、思う存分研究、自己啓発を行うことができたと思う。国際開発研究科で出会った全ての人々からの経験、習得した知識を財産として持ち続け、夢に向かって有意義な人生を歩んでいきたい。



卒業生・修了生の大学生活の思い出文集

丑のあどころ

環境学研究科 D3 石川菜央 修了生

これから挙げる名前は、私が地理学を専攻し始めてから7年間、青春をかけて追いかけてきたものに付けられている名前である。「龍王丸」、「琉球白虎」、「突撃チワワ」、「農政王」、「突撃菜央ちゃん号」…。さて、何の名前か。答えは、牛である。牛と言ってもただの牛ではない。闘牛、つまり闘牛である。日本の闘牛は、牛同士を闘わせて、先に逃げた方を負けとするルールで、全国6ヶ所において行われている伝統行事である。



徳之島にて(前列向かって右端が筆者)

私の闘牛との出会いは、学部3年生。地理学研究室では、夏に1ヶ所に合宿して各自が調査を行い、レポートを作成する「実習旅行」がある。私が初めて参加した時の実習先が、愛媛県宇和島市であった。文化に関心を持つ私にとって、宇和島市の名物である闘牛は、最も不思議なものとして強烈に目を引いた。農業で使うわけでもないのに、なぜ人々は牛を飼うのか。闘牛の裏舞台はどうなっているのか。その疑問をきっかけに研究がスタートした。そして、実習旅行のレポートは、卒業論文へと発展した。さらに修士論文では、宇和島の闘牛の生産地である島根県隠岐に、2ヶ月ほど住み込んだ。闘牛は、地域でどのような役割を果たしているのか。いつもその問いを胸に、フィールドに出かけていき、1000人以上の方にお会いした。その中で、闘牛は単なる牛同士の闘いではなく、人々を親しい間柄へと結びつけるパワーがあることが分かってきた。売買や情報交換を通じた交流は、全国に広がっている。そして私も調査を通してたくさんの方と関わりを持っていく中で、知らず知らずのう

ちに、牛を通じた人々のネットワークの中に入り込んでいた。走り出した牛の怒濤の勢いは止まらず、闘牛を求めて日本中を駆けめぐっているうちに、遂に、博士論文「日本の闘牛」が出来上がってしまった。闘牛が最も盛んな鹿児島県徳之島では、現在、私が出資者の1人となった縁で、名前を付けていただいた闘牛「突撃菜央ちゃん号」が、すくすくと育っている。7年間を振り返ると、自分で言うのもなんだが、年頃の娘が、牛の尻ばかりを追いかけて猛進しているのは、時には快感だったが、時にはしんどいものであった。あまりのことに、人間をやめて牛になろうかと思いつめたほどである。そんな時に理屈ではなく、存在そのものによって、私を励ましてくれたのが、フィールドで出会った方々であり、地理学の先生や仲間たちであり、友人、家族であった。人々とのつながりによって生かされていたのは、誰よりも私自身だったのである。

大学院生活を振り返って

国際言語文化研究科 D3 川上尚恵 修了生

7年前の9月。私は、国際言語文化研究科の入学試験を受けるために、初めて名古屋大学に足を踏み入れた。当時はまだ地元沖縄の大学4年生であり、入学試験を控え緊張しながら、本山から汗だくになり歩いてきた。どこからか名古屋大学かもわからずにふらふらと歩いていた時、バス停から中央図書館に向かう並木道の綺麗さにはともし、しばし見とれてしまった。緑が生い茂る木々を見ながら、漠然と「こんな大学で勉強できたらいいなあ」と思っていたのだが、なんとかその希望がない名古屋大学で研究生生活をスタートすることになった。

前期課程は授業数も多く、毎日が慌しく過ぎていった。授業以外では、研究発表会やシンポジウムなどを通して、名古屋大学以外の院生と知り合うことができた。その中で、同じような目標を持つ同期生と、ああでもない、こうでもない議論を交わしていたことが懐かしく思い出される。試行錯誤で研究を進めながら、新しいことを知る喜びと論文を書く辛さを味わった。

また、名古屋での生活は私にとって初めて地元を離れた生活であったため、沖縄とは違う環境にカルチャーショックを受けることも多々あった。名古屋に来て初めて迎えた秋には紅葉の美しさに感動し、初めて雪が降った時には雪が降っているときに傘をさすべきかどうかわからず、早朝から同期生に電話をかけ教えてもらったこともあった。

後期課程に入ってからは、それまで共に歩んできた同期生もそれぞれ違った道を選び始め、私自身も大学院を休学し中国吉林省で日本語講師として1年半を過ごした。その1年半は



(後左から3番目が筆者)

大学院で学んだことを現場で経験できたよい機会であったが、教師としての未熟さを痛感し、落ち込むこともあった。しかし、周りの先輩や先生方に助けられ、何とか務めを果たすことができたと思う。後期課程の後半は日本語の講師と院生との二足のわらじを履くことになったが、前期課程よりも研究の厳しさをさらに実感した。正直にいうと研究をやめようかと思った時もあったが、指導教員を始め、先輩や友人からの叱咤激励を受け、あきらめずに研究を続けることができた。

名古屋大学での6年半は、楽しいことばかりではなかったが、辛いこともあった分、周りの友人や先輩や後輩とのつながりが一層強くなったように思う。この6年半で学問や経験を得たことはもちろんであるが、それ以上に様々な人と知り合い、関係を築いてくれたことは何にも代え難い貴重な財産になった。最後に、長い長い学生生活をずっと見守ってくれた家族に対して、この場をかりてお礼をいいたいと思う。本当にありがとう。

recollections • collection • of • the • graduate • & • completion

明けやすき夜

情報科学研究科 D3 遠山仁美 修了生

窓の外を見ると、いつの間にか日が落ちていて、原稿の締切りが迫ってくる恐怖を覚え、また気がつくと、薄っすらと明るくなっていて、外に人の気配を感じ、少し元気を取り戻す。そんな日々を、いったいどれぐらい研究室で過ごしたでしょうか。この分析の先は行き止まりなのはと絶望したり、それでも何かは得られるはずだと、手当たり次第に調べたり、とてとても苦しい大学院生活でした。しかし、これが没頭するということ、そして、二度と経験できないであろう、研究だけに集中していただける貴重な時期であったと思います。

「データ分析とは、データを観て、観て、解析して、その結果がノイズだらけでも、また観て、そして観る!」と、研究に対する根性を教えてくれた先生方、面白い例えで周囲の笑いを誘いながら、専門的な難しい話を解説して下さいました先輩方、いつ



(前から2列目、左から2番目が筆者)

も安らぎをもたらし、励ましてくれた友人や研究室の頼もしい仲間達、本当に多くの方々を支えられ、ここまでたどり着くことができました。

私の場合は、博士課程前期は文系の研究科を修了し、情報科学研究科には、博士課程後期から在籍致しました。用いられる言葉や、研究のスタンスも異なり、当初は、どこに向かって進んだらよいのか、1人遭難してしまったような不安にかられました。研究室のゼミにおいても、議論がしっかり噛み合っているようで、実は、全く別々のステージで議論が展開されていたことに後から気づいたり、そんな大変な時間が怒涛のように過ぎていきました。しかし、最もご苦労をされたのは、指導教員である松原先生であったと思います。いつも厳しく、とにかく厳しく御指導下さり、そして、ここまで導いて下さいましたことに心より感謝しております。理系+文系の、1+1="2+α"のアルファまでも生まれつつあるような、かなり良い線まで来ていたのではないかと、今では楽観的に鳥瞰することが出来ます!このプラスアルファをも目指せたということ自体、私にとって輝く宝物です。カジノでルーレットが勢いよく回転するのを覗き込んで、玉の行方を追っている瞬間のような、何かが起こりそうなエキサイティングな時間でした。このような貴重な時間に遭遇することができた私は、とてとても幸運でした。また、多くの学会や国際会議において、研究成果を発表する機会を与えられたこと、様々な研究の世界を見せて頂いたことに深く感謝しております。この貴重な経験を生かし、これからも頑張ってくださいと思います!

法科大学院生活を終えて

法科大学院 3年 原田 佳那子 修了生

法科大学院に入学してはやくも3年が過ぎ、卒業となりました。入学当初は、不安を感じながらも、新しく始まる法科大学院制度に期待を膨らませていました。

大学の学部の授業では、先生の講義を聴くだけでした。しかし、法科大学院の授業は、学部とは異なり、少人数で双方向授業が行われるので、積極的に授業に参加することで、自分の知的好奇心を充実させることができました。

特に法科大学院に進学してよかったと思うのは、一緒に切磋琢磨しながら勉強をすることができる仲間に出会えたということです。いろいろな人と話していると、自分では気づかなかったことを発見し、また、自分の思い違いを直すことで、大変勉強になりました。自分とは違う思考を多くの人から学ぶことができたのは、法科大学院ならではの魅力です。さらに、学部とは異なり、社会人経験者の方も多く、その真剣さには学ぶことが多かったです。

法科大学院は、法曹をめざす場所です。それでは法曹というのはどのような仕事なのでしょう。独立して仕事ができる、お金をもうけることができる、一生続けられる仕事である、涉外事務所海外を相手にバリバリ仕事をする…等さまざまなイメージがあると思います。

そのような様々なイメージがある中で、私が3年間の法科大学院生活を終えて一番強く思うことは、法曹という職業は、

社会正義を実現できる職業であるということです。自分の理念を実現することができる職業だと思います。やりがいのある仕事であると同時にまた厳しい仕事だと思います。そのような将来の仕事に向けて、同じ法曹を目指す学友と、法科大学院で共に勉強できたというのは、大変恵まれたことだったと思います。

この経験を卒業後もいかしていきたいと思っています。

3年間教えてくださった先生方、ありがとうございました。



(法科大学院自習室の風景)

特集1

a special feature article 1

平成18年度名古屋大学 体育会会長表彰式

名古屋大学体育会は、平成18年12月4日(月)野依記念学術交流館1階会議室において、学務部の協力のもと、名古屋大学体育会会長表彰式を挙行了しました。

この表彰は、名古屋大学体育会における優秀な個人・団体及びその指導者の栄誉を讃え、その功績を広く顕彰することを目的としたもので、今年で18回を数えます。

今年は、11月28日(火)の体育会会長表彰審査会の審査を経た「個人の部」13名、「団体の部」7団体が、本学体育会会長である平野総長から表彰され、1年間のめざましい成績を讃えられました。

なお、受賞者及び受賞団体には副賞として、名古屋大学校友会から記念品等が贈呈されました。



【個人の部】

運動部名	氏名(学部・学年)	出場大会名・成績
弓道部	松川 あゆみ (農・2年)	第16回東海学生弓道女子新人戦 女子個人 優勝
漕艇部	奥村 麻友 (経済・4年)	第38回中部学生ボート選手権大会 女子シングルスカル 優勝
ライフル射撃部	平山 雄斗 (工・3年)	第24回中部学生ライフル射撃伏射大会 10mエアライフル伏射60発競技 準優勝
相撲部	鈴木 博之 (工・4年)	第31回西日本学生相撲体重別選手権大会 75kg未満級 準優勝
フィギュアスケート部	関谷 雄飛 (理・4年)	第35回中部学生氷上競技大会 フィギュア競技の部 Aクラス男子 優勝 第26回国立大学フリースケーティング競技会 Aクラス男子 優勝
ボクシング部	堀 心一 (医・2年)	第45回中部学生ボクシング選手権大会 ライト級 優勝
アーチェリー部	三仙 真也 (文・4年)	第27回北信越国民体育大会 アーチェリー競技 成年男子個人 3位
陸上競技部	金尾 洋治 指導者(監督)	第67回東海学生駅伝競走大会 優勝 第18回出雲全日本大学選抜駅伝競走 18位
舞踏研究会	小島 健児 (工・3年) 飯田 亜里紗 (医・3年)	第42回中部日本学生競技ダンス選手権大会 八種目戦団体戦 優勝
舞踏研究会	神谷 真人 (工・4年)	第42回中部日本学生競技ダンス選手権大会 種目別戦 クイックステップ 優勝 第42回中部日本学生競技ダンス選手権大会 種目別戦 タンゴ 優勝 第42回中部日本学生競技ダンス選手権大会 種目別戦 ワルツ 優勝 第33回中部日本学生競技ダンス選手権大会 モダン戦 優勝
ヨット部	河崎 祐輝 (法・2年) 渡邊 淳史 (経済・3年)	2006年度中部学生ヨット個人選手権大会 国際スナイブクラス 優勝

【団体の部】

運動部名	出場大会名・成績
ライフル射撃部	第24回中部学生ライフル射撃伏射大会 10mエアライフル伏射60発競技 優勝
陸上競技部	第67回東海学生駅伝競走大会 優勝 第18回出雲全日本大学選抜駅伝競走 18位 第45回全国七大学総合体育大会 陸上競技女子 5連覇
アーチェリー部	2006年度東海学生アーチェリー選抜選手権大会 男子団体 優勝 2006年度東海学生アーチェリー個人選手権大会 男子団体 優勝
航空部	第45回全国七大学総合体育大会 7連覇
相撲部	第24回全国国立大学対抗相撲大会 2連覇 第42回中部日本学生競技ダンス選手権大会 種目別戦 優勝 第42回中部日本学生競技ダンス選手権大会 八種目戦団体戦 優勝
舞踏研究会	第37回中部日本学生競技ダンス選手権大会 学年別戦 団体戦の部 優勝 第33回中部日本学生競技ダンス選手権大会 モダン戦 優勝
漕艇部	第38回中部学生ボート選手権大会 女子総合 優勝 第38回中部学生ボート選手権大会 男子総合 優勝 第38回中部学生ボート選手権大会 男子舵手付フォア 優勝 ジャパンカップ第28回全日本軽量級選手権大会 エイト 8位

(表彰対象期間:平成17年11月1日~平成18年10月31日)

特集2

a special feature article 2

第47回体育会 リーダーズ・アセンブリー

名古屋大学体育会競技局長 下浦公輔

平成18年12月9日(土)、10日(日)の2日間、東海地区国立大学共同中津川研修センターにおいて第47回リーダーズ・アセンブリーが行われました。通称L.Aと呼ばれるこの研修会は、体育会所属クラブの主将や主務などの各クラブを引っ張ってゆくリーダーが一堂に会し、クラブの強化やリーダーとしての在り方を共に考える事、またクラブ間の親睦を深める事を目的としています。

今年のL.Aでは「学生の自主活動であるクラブ活動をより充実したものとするために、学生の我々がクラブに対して行えることは何か?」ということをじっくりクラブの方から話を聞ける機会を設けました。各クラブで「現在こういったことで困っている」、「こうできればもっと充実した練習が行える」等様々な意見が出されました。勿論、施設や時間など制約はたくさんありクラブからの意見を必ず反映できるとは限りませんが、これらの意見を参考に同じ学生の立場として支援活動を行っていきたいと思います。

また、L.A恒例の講演会ではアテネオリンピック女子トライアスロンヘッドコーチを務められた飯島健二郎先生を招き「スポーツを通じた人間育成」をテーマに講演をしていただきました。プロアスリートとしての世界全国各地での経験談を交え、スポーツに取り組むこ



とで見る本当の自分の姿や、同じプレイヤー同士で称えあうことの喜び、そして後輩育成のために先輩から後輩に示す「ビジョンの大切さ」について熱く語っていただきました。参加者から「チーム作り、後輩の指導の参考になった」との感想が多く寄せられました。

これらの他にも分科会やドッチボール大会、懇親会などのイベントを通じてクラブ間の交流を深めました。クラブ間での交流、また私自身も常任委員として直接クラブの人との交流により今後の体育会のビジョンを考えるいい機会になりました。

最後に、このリーダーズ・アセンブリーを開催するにあたりお世話になった関係者、参加者の皆さんに心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

第47回体育会リーダーズ・アセンブリー日程表

	12月9日(土)	12月10日(日)
7:00		起 床
8:00	豊田講堂前集合	朝 食
9:00	名古屋大学発	
10:00		レクリエーション (ドッチボール)
11:00	研修センター着	
12:00	開講式	昼 食
13:00	体育会との話し合い	体育会クイズ
14:00	講演会	学務部との話し合い
15:00	講師：飯島健二郎 (アテネ五輪トライアスロン女子ヘッドコーチ) 題目：「スポーツを通じた人間育成」	閉講式・記念撮影 研修センター発
16:00	分科会 [クラブの強化とクラブにおける幹部の役割]	名古屋大学着
17:00		解 散
18:00	入 浴	
19:00	自 由 時 間	
20:00	懇 親 会	
21:00		
22:00	自 由 時 間	
23:00	就 寝	

会 場:東海地区国立大学共同中津川研修センター



クラブ活動

club • extracurricular • activities

■水彩部

通り過ぎる風景、よく見る雑誌の1ページ、自分にとって大切な人・・・ちょっとだけ意識すれば、毎日の中にも心を打つ映像は溢れています。僕たち名大水彩部は、そんな映像をモチーフに、水彩絵の具で絵を描いています。初心者だっていい。へたくそだって構わない。たくさんの色が水に溶け、画面いっぱいに広がる、そんな絵を描くことの楽しさを知っていれば。一さあ、君も僕たちと一緒に、絵を描こう。
・活動→水・土曜日に、教室を借りて絵を描いています。
・イベント→ 展覧会、スケッチ、旅行など



■バドミントン部

<http://www2.jimu.nagoya-u.ac.jp/badminton/index.htm>



私たちバドミントン部は、現在男子は東海リーグ1部、女子は2部に在籍し、さらに上を目指して部員それぞれが目標を持ち日々練習に励んでいます。

活動は水曜・金曜・土曜の週3回、第一体育館にて行っているため、バドミントンに興味がある方、もっとバドミントンがうまくなりたいという方は是非体育館まで足を運んでみてください。

トピックス

TOPICS

■第43回須賀杯争奪駅伝競走大会

実行委員長 野々村 洋平(名古屋大学体育会)

11月26日午前9時50分、合図と共に第43回須賀杯争奪駅伝競走大会がスタートしました。共同開催校の豊田工業高等専門学校から名古屋大学までの約30kmのコースを6区間に分けて両校の選手が走りました。今年も運動系クラブだけではなく、文化系サークル、研究室などからも多くの人が参加しました。

昨年の須賀杯駅伝の参加チームは両校合わせて50チームで、参加者は約500人と、体育会が行っている大会の中では最も規模が大きく、盛り上がる大会です。準備期間中は、自分がこんな大きな大会を企画していることに嬉しさを覚えながら、それ以上に大きな責任を感じていました。それでも、補佐の2人にも作業を手伝ってもらいながら順調に準備を進めることができました。補佐の2人には、多くのことを手伝ってもらい非常に助かりました。

大会当日、ゴールまで走り終えたチームの人たちの笑顔を



見ると須賀杯駅伝を企画して本当によかったと感じました。なぜなら、参加者の人たちが、次の人へタスキを繋ぎ、全員でゴールに向かって走っていくことで、仲間の絆を強めることができたと感じたからです。ひとつのことに向かって、みんなで一つのことをやり遂げることで得られる充実感、普段の生活ではなかなか得ることはできないと思います。

須賀杯駅伝を準備し始めてから当日までの約3ヶ月間、よい経験をさせてもらうことができました。今回の大会のよかった点はそのままだ、改善すべき点は改善して、次回44回の須賀杯駅伝大会の担当者にタスキを渡そうと思います。

最後に、大会の開催は多くの方々協力によってできたと思います。お世話になった方々や参加者のみなさんへ心より感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

第43回須賀杯争奪駅伝競走大会成績(上位20チーム)

順位	ゼッケン番号	チーム名	団体名	所属	総タイム
1	115	えぬっこ	陸上競技部	名大	1:32.15
2	15	トロイの木馬	陸上競技部	高専	37.21
3	116	リパース&リパース	オリエンテリング部	名大	41.39
4	105	Super Sub A	Super Sub	名大	42.03
5	4	卓球部A	卓球部	高専	44.17
6	91	N I G A U R I	バドミントン部	名大	44.41
7	100	卓球部A	卓球部	名大	45.17
8	102	ソフトテニス部A	ソフトテニス部	名大	45.27
9	17	せぼいドン	水泳部	高専	45.42
10	14	ノアの箱舟	陸上競技部	高専	46.43
11	98	体育会スキー部	スキー部	名大	47.04
12	106	Super Sub B	Super Sub	名大	47.40
13	1	野球部A	野球部	高専	48.10
14	99	名大漕艇部もじやりん	漕艇部	名大	48.52
15	111	硬テニスA	軟式テニス部	高専	50.38
16	113	S P A R K I N G !!	名古屋大学大学院	名大	51.31
17	108	水陸両用チーム	水泳部	名大	53.42
18	8	チキンスターズ	軟式テニス部	高専	54.03
19	96	オカジョ2006	硬式野球部	名大	55.30
20	109	水泳部・超OB	水泳部	名大	57.38

区間賞

順位	名前	チーム名	団体名	所属	区間タイム
1区	早川 慎一	えぬっこ	陸上競技部	名大	16.31
2区	鈴木 健三郎	トロイの木馬	陸上競技部	高専	11.47
3区	梶田 拓弥	えぬっこ	陸上競技部	名大	12.12
4区	田中 佑治	えぬっこ	陸上競技部	名大	17.32
5区	石井 健太	体育会スキー部	スキー部	名大	20.18
6区	羽生田 智彦	えぬっこ	陸上競技部	名大	12.52

学務部の窓

the • window • of • the • student • affairs • Dept.

■学生会館の利用状況

学務部学務企画課

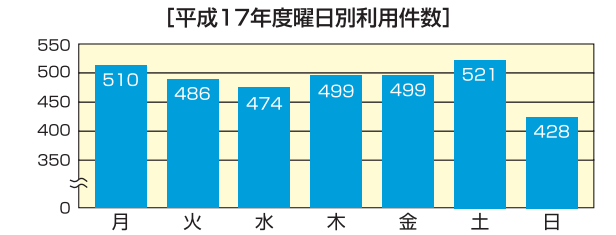
学生会館は、本学東山地区の北端(北部厚生会館の北隣)にあり、学生の課外活動、自治活動等に利用できる施設です。中には集会室、和室、談話室及び理容室があります。集会室は9室(50名用2室、30名用1室、25名用3室、20名用2室、15名用1室)、和室は2室あり、これらは主としてサークル団体が課外活動に利用しています。談話室は教職員や学生が授業外の時間等に利用できるコーナーで、休養したり、碁、将棋を楽しむことができます。

平成17年度においては、年間359日開館され、集会室及び和室の利用件数は3,417件(1日平均9.5件)、利用者数は77,365人(1日平均215.5人)となっています。



[平成17年度月別利用状況]

年 月	開館日数	利用件数	利用者数		
			学 生	教職員	計
17. 4	30	302	7,503	0	7,503
5	31	305	6,414	0	6,414
6	30	264	5,616	0	5,616
7	31	306	6,919	0	6,919
8	31	281	6,496	0	6,496
9	30	260	5,543	0	5,543
10	31	324	7,537	0	7,537
11	30	307	7,076	0	7,076
12	28	270	6,010	0	6,010
18. 1	28	253	5,918	0	5,918
2	28	266	5,895	0	5,895
3	31	279	6,438	0	6,438
計	359	3,417	77,365	0	77,365



■中津川研修センターの利用状況

学務部学務企画課

この研修センターは、東海地区国立大学の共同利用施設として学外における演習・実習、課外教育等を通じて学生・教職員間の、さらには大学間の交流を図り、学生の人間形成に資することを目的として設置されたものです。

この施設のある岐阜県中津川市の苗木地区は、旧苗木藩の城下町として、又、風光明媚な地域としても知られ、近くには、中津川市鉱物博物館、恵那峡県立公園等が、又少し足をのせば、旧中山道沿いに島崎藤村記念館、馬籠等の旧宿場があります。

5人以上の団体で4泊5日以内の研修等の計画を立てれば、誰でも気軽に利用できます。平成17年度においては、43団体、延3,028名(実人数1,615名)の利用がありました。

利用についての詳細は、学務部学務企画課(052-789-2165)へ問い合わせください。

施設の概要

- 研 修 棟 (面積:1,348m²)
 - ・大研修室 (100人収容)
 - ・中研修室 (50人収容、2室分割可)
 - ・宿 泊 室 和室7室(10人×2室、8人×5室) 洋室5室(8人×5室)
- 体 育 館 (面積:897m²)
- 多目的広場 (面積:3,000m²)



[平成17年度利用状況]

区 分	利用者数 (人)	%
学 生	1,687 (603)	55.7
教職員	151 (33)	5.0
その他	1,190 (404)	39.3
計	3,028 (1,040)	100.0

[平成17年度大学別利用団体数]

大学名等	団体数	%
名古屋大学	28	65.1
名古屋工業大学	1	2.3
愛知教育大学	1	2.3
豊橋技術科学大学	0	0.0
岐阜大学	2	4.7
三重大学	0	0.0
静岡大学	0	0.0
浜松医科大学	0	0.0
東海地区国立大学	2	4.7
公・私立大学	3	7.0
その他(高専地域団体等)	6	13.9
計	43	100.0

◎延利用者数で示す。
()内は女子で内数。

学務部の窓

■学生教育研究災害傷害保険制度案内

学務部学生総合支援課

みなさんが、講義、実験・実習や体育実技など正課の授業中、各種大学行事中、大学施設内での休憩中、課外活動あるいは通学中などにより不慮の災害事故により身体に障害を被ることは、万全の注意を払っていても発生することがあります。

このような不測の事態の被害の救済のため「学生教育研究災害傷害保険制度」があります。保険料は極めて低額になっておりますので、みなさんは必ず加入するようにしてください。

本学では、平成16年度に75件の事故に対して、約492万円の保険金が支払われています。

新たにこの保健に加入しようとする学部学生（編入学者または留年・休学により保険の期限切れとなっている学生）、大学院学生、研究生などは、原則として4月又は10月の各募集期間中に所属学部等の教務学生掛又は事務掛（工学部・工学研究科は教務課厚生担当、医学部医学科は第一学務掛、医学部保険学科は第二学務掛）で所定の手続きをしてください。

なお、既に加入している学生で、この保険の対象となる事故が生じた場合、ただちに事故の日付、場所、状況、傷害の程度を上記の担当掛あて連絡してください。

〈医療保険金について〉医師の治療を受けたとき、治療日数により下記保険金が支払われます。

入院加算金については、1日から対象となります。	平常の生活ができるようになるまでの日数	支払保険金	入院加算金(180日を限度)
	治療日数 1日～3日	—	入院1日につき 4,000円 (注)入院加算金は、医療保険金に関係なく、入院1日目から支払われます。
正課中・学校行事中 (平常の生活ができるようになるまでの治療日数が4日以上の場合が対象となります。)	// 4～6	6,000円	
特約加入者の通学中・学校施設等相互間の移動中 (平常の生活ができるようになるまでの治療日数が7日以上の場合が対象となります。)	// 7～13	15,000	
上記以外の学校施設内・学校施設内外での課外活動中 (平常の生活ができるようになるまでの治療日数が14日以上の場合が対象となります。)	// 14～29	30,000	
	// 30～59	50,000	
	// 60～89	80,000	
	// 90～119	110,000	
	// 120～149	140,000	
	// 150～179	170,000	
// 180～269	200,000		
// 270～	300,000		

(注)上記の保険は、生命保険、健康保険、他の傷害保険、加害者からの賠償金と関係なく支払われます。

■学生教育研究災害付帯賠償責任保険制度案内

学務部学生総合支援課

1. 保険の内容

国内において、学生が、正課、学校行事及びその往復中で他人にケガをさせたり、他人の財物を損壊したことにより被る法律上の損害賠償を補償します。

2. 対象となる活動範囲

- Aコース** 学生教育研究賠償責任保険(略称「学研賠」)正課、学校行事及びその往復。
(Bコースの対象範囲を含む)
- Bコース** インターンシップ・教職資格活動等賠償責任保険(略称「インターン賠」)
インターンシップ・介護体験活動、教育実習、保育実習、ボランティア活動およびその往復。但し、学校が、正課、学校行事、課外活動(注)として認めた場合に限る。(臨床・看護等の医療関連全般の実習を除く)
(注)ここでいう「課外活動」とは、インターンシップ・ボランティア活動を実施することを目的として組織され、大学の学内学生団体としての認証を受けた団体の管理下の活動をいいます。
- Cコース** 医学生教育研究賠償責任保険(略称「医学賠」)正課、学校行事及びその往復。
(Bコースの対象範囲を含む)
- Dコース** 法科大学院生教育研究賠償責任保険(略称「法科賠」)正課、学校行事及びその往復。
臨床法学実習

the window of the student affairs Dept.


3. 補償の対象者

学生教育研究災害傷害保険に加入している学生に限ります。


4. 補償金額・保険料

活動内容 補償内容	Aコース	Bコース	Cコース	Lコース	
	学生教育研究賠償責任保険(略称「学研賠」)	インターンシップ・教職資格活動等賠償責任保険(略称「インターン賠」)	医学生教育研究賠償責任保険(略称「医学賠」)	法科大学院生教育研究賠償責任保険(略称「法科賠」)	
対人賠償	1名1事故1億円限度(※免責金額5,000円)				
対物賠償	1事故250万円限度(※免責金額5,000円)				
人格権侵害補償				1事故250万円限度(※免責金額5,000円)	
保険料分担金	1年間	400円	250円	800円	3,000円
	2年間	800円	500円	1,600円	6,000円
	3年間	1,200円	750円	2,400円	9,000円
	4年間	1,600円	1,000円	3,200円	

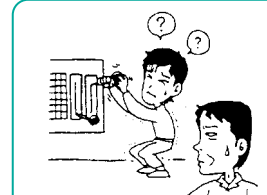
●例えば次のような事故のケースが対象となります



① 正課で化学の実験中、間違えて薬品を混ぜ、爆発事故を起こしてしまい、相手に火傷を負わせてしまった。
(A・Cコース対象)



② 学園祭で、焼鳥屋の模擬店を出店したが食中毒事故を出してしまい、5人が入院してしまった。
(A・Cコース対象)



③ インターンシップ活動中、派遣先の機械を使用し、誤って壊してしまった。
(A・B・Cコース対象)



④ 大学へ行く途中、駅の階段を駆け降りたとき、前にいた老人を突き飛ばしてしまい、大けがをさせてしまった。
(A・Cコース対象)

■学研災付帯学生生活総合保険案内

学務部学生総合支援課

学研災付帯学生生活総合保険は、学生教育研究災害傷害保険加入者を対象に学生生活全般に補償を広げた保険で、学研災で補償されない部分の補償をするものです。加入は、任意加入となっています。詳細は、次のホームページを見て下さい。

財団法人 日本国際教育支援協会 <http://www.jees.or.jp/>